（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	木原　恵美子
論文題目	構文現象への認知言語学的アプローチ--同族目的語構文を中心に--		

（論文内容の要旨）

本論文は、認知言語学の枠組みに基づく英語の同族目的語構文と関連構文（使役移動構文、軽動詞構文、等）の理論的・実証的研究である。全体は７章から成る。

第１章では、認知言語学の文法モデルの中核を成す構文文法の視点から、これまでの理論言語学の研究の背景となる文法研究の批判的な検討がなされる。特に本章では、これまでの構文文法の代案として提案されている Croft、Fillmore、Goldberg、Langacker の文法モデルを批判的に検討し、本論文が採用する認知言語学の記号的文法観の視点から、構文文法のモデルの位置づけを試みている。構文研究に際し、本論文の分析の枠組みとして採用される記号的文法観のモデルは、基本的にはLangackerの文法モデルに近い。ただし、本論文では、後者の記号的文法観に基づくモデルは共時的なモデルであるのに対し、本研究で採用される文法モデルは、言語の通時的な側面と共時的な側面を構文現象の分析に反映する通共時的なモデルであると主張し、認知言語学における文法研究のアプローチに関し新たな視点を提供している。

第2章では、前章で提示された記号的文法観に基づく構文文法の枠組みに基づき、日常言語の構文の発現過程を、言語主体の事態把握を反映する認知プロセス（カテゴリー化、視点の投影、プロファイリング、等）との関連で明らかにしている。また本章では、構文の意味構造を記号的文法観の記述概念であるスキーマ化、意味合成、等の概念によって規定することにより、同族目的語構文をはじめとする構文現象を一般的に規定するための記述と説明の枠組みを提示している。同族目的語構文の典型的な特徴は、行為を示す自動詞をとるにも拘らず、その直後に形容詞によって修飾される同族の行為名詞をとる点にある。この種の現象は、一見したところ統語的なパターンが異なる転移修飾構文や軽動詞の*make*構文（makeの直後に形容詞に修飾される行為名詞をとる構文）にも観察される。これらの現象の特異な点は、表層の統語レベルでは行為名詞を修飾している形容詞の修飾関係の曖昧性（様態の修飾 vs. 行為の修飾）にある。本章では、この種の曖昧性を分析するための道具立てとして、上記の記号的文法観の記述概念（スキーマ化、意味合成、プロファイリング、等）の概念の有効性を論じている。この種の認知的概念の道具立ては、本論文の４章と５章の構文現象の分析の道具立てとしても重要な役割を担う。

第3章では、構文の表層分布の記述のための文法モデルとして、Croft、Fillmore、Goldberg、等の文法モデルのアプローチと本論文の記号的文法観に基づく文法モデルを比較・検討し、認知言語学の分析の中核を成す構文ネットワークモデルに基づいて、構文現象の拡張過程と動的変化の側面の解明を試みている。特に本章では、言語現象はレキシコンから文法まで連続体を成すという記号論的文法観に基づき、同族目的語構文とこれに関連する構文の創造的拡張、慣用化、イディオム化、等を反映する動的変化（特に、各種の構文の基本タイプから拡張構文への動的変化）の体系的な分析を

試みている

第4章では同族目的語構文と同構文に関連する使役移動構文を考察することで、構文を構成する記号構造が通共時的にも連続体を成している事実を明らかにしている。同族目的語構文には、通常は目的語を伴わない動詞(例えば、*laugh, smile, sleep, sneeze*)が同族目的語を伴って生起するため、同構文は他の構文に比べて特異な構文として従来から位置づけられてきた。そのため先行研究の多くが動詞に注目しており、動詞以外の要素の分析はなされていない。本論文では、同族目的語構文には本来語を起源とする動詞と同族名詞が生起することが多く、ロマンス語起源の動詞と同族名詞は生起することがほとんどないという言語事実に基づいて、形態素が構文の容認度に影響を与えている点を明らかにしている。この事実に基づいて、本論文では、構文の中心を成す動詞の形態論的制約が構文の連続性に起因する点を指摘している。さらに本章では、同族目的語構文と軽動詞の*make*構文が形態論的および意味論的にも棲み分けていることを示し、同族目的語構文は英語起源の構文であり、軽動詞の*make*構文はロマンス語起源の構文であることを示している。

第5章では、同族目的語構文の多義構造が、形容詞と同族名詞の意味合成と構文スキーマから規定される点を明らかにしている。従来の研究では、動詞の形式と意味だけに注目していたため、構文を多義にする原因の解明までには至っていない。本章では、形容詞による二重修飾構造と同族名詞のエピソード性に注目することで、形容詞と同族名詞の意味合成から同構文の多義構造が生じることを明らかにし、同族目的語は付加詞ではなく補部であることを確証している。さらに本章では、構文の意味を発話の場にグラウンディングさせて分析することにより、語の意味合成を動機づける構文スキーマが「客観的に捉える参与者の身体動作」または「その動作の様態」という二つのプロセスをプロファイルすることができるため、形容詞と同族名詞の意味合成のパターンも二通り存在して、構文自体が多義になる点を明らかにしている。

第6章では、転移修飾現象をスキーマ化と意味合成に基づいて分析するとともに、転移修飾の統語的制約と意味的制約を抽出し、同現象と同族目的語構文との関連性を明らかにしている。先行研究の多くは、形容詞の修飾構造に注目していたため名詞の意味構造は十分に分析されていない。これに対し本章では、第5章の手法と同様に、形容詞の修飾構造と名詞のエピソード性に注目し、転移修飾による構文の発現のメカニズムの解明を試みている。

第７章では、理論面・実証面の双方の観点からみた本研究の意義と一般的な展望が論じられている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、これまでの認知言語学の研究で本格的な分析が進められていない英語の同族目的語構文と関連構文（使役移動構文、軽動詞構文、等）の体系的な分析を試みた研究である。

従来の理論言語学の構文研究では、動詞の内在的意味が文の中心であり、個々の構文の意味と構文間の表層分布は、語彙レベルにおける動詞の概念構造によって一般的に規定するアプローチが前提とされている。この語彙主義的アプローチに基づく文法研究の基本的な考え方は、構文現象は、動詞の下位範疇化の結果であり、動詞の意味から構文の可能な分布関係を予測することができるとする点にある。また、この前提のもとに、動詞は文の中核に位置し文の中心的意味を規定し、構文の表層パターンは単なる随伴現象であるに過ぎないとしている。これに対し、本研究は、記号的文法観に基づく構文論の視点から、英語の同族目的語構文と関連構文（使役移動構文、軽動詞構文、等）の分析を通して、構文自体のゲシュタルト的な意味と表層レベルにおける以上の関連構文の分布関係の体系的分析を試みている点に独創性が認められる。

構文の記述と分析は、日常言語の中核を成す文法の解明につながるため、構文現象を体系的に記述することができる理論の構築は、現代の理論言語学に課せられた最重要課題の一つである。理論的な観点から見た場合、本論文は、日常言語における構文現象だけではなく、構文の使用のゆらぎという言語運用の側面も含めた上で、構文をより包括的に分析できるアプローチとして認知文法のアプローチが妥当であると主張している点が注目される。さらに本論文では、以上の構文の表層分布のゆらぎのケーススタディとして、同族目的語構文の中心を成す動詞の語源にかかわる要因に注目し、問題の動詞がゲルマン語系の語源かロマンス系の語源かという通時的、形態的な制約を説明の基盤として、共起的な観点からみた同族目的語構文の表層分布のゆらぎの予測を試みている点に独創性が認められる。また、本論文は、認知文法の文法観（すなわち、「レキシコンから文法までは共時的に連続体を成す」という文法観）を、以上の同族目的語構文の通時的、形態的な制約の視点から批判的に検討し、レキシコンに関わる語彙レベルの表現から構文レベルの表現の表層分布の連続性は、通時的な要因と共時的な要因の双方が関わる「通共時的」な連続性を成すという新たな仮説を提案している。この仮説の妥当性に関しては、より包括的な語彙現象と構文現象の今後の研究が必要となるが、従来の言語学の研究では提案されていない興味深い仮説として注目される。

実証的な観点から見た場合、本論文は、次の点を明らかにしている。第一に、まず同族目的語構文の多義性に注目し、動詞にのみ注目していた先行研究の限界を示し、動詞と共起する言語要素も考慮した意味合成のプロセスと構文スキーマとの関連で同構文の多義構造を明らかにしている。第二に、同族目的語構文と関連する転移修飾に関わる構文現象に注目し、形容詞の修飾構造のみに注目していた先行研究の限界を指摘し、名詞の意味構造を認知的に捉えることで、転移修飾の構文と同族目的語構文の関連性を明確化している。第三に、言語構造を、パースペクティヴ(perspective)と解

釈(construal)といった話者の視点を考慮し、レキシコンから文法までを連続体として捉え、文の意味を話し手と聞き手を含む発話の場にグラウンディングさせることで、語彙レベルと構文レベルの意味を発話の場に基づいて体系的に記述する可能性を示している。第四点としては、次の点が注目される。通常、同族目的語構文には、目的語を伴わない動詞(例えば、*laugh, smile, sleep, sneeze*)が同族目的語を伴って生起するため、この種の構文は、他の構文に比べ特異な構文として位置づけられてきた。そのため先行研究の多くが動詞に注目しており、動詞以外の要素の分析は殆どなされていない。これに対し、本論文では、同族目的語構文には英語を起源とする動詞と同族名詞が生起することが多く、ロマンス語起源の動詞と同族名詞は生起することが殆どないという言語事実に基づいて、通時的、形態的な制約が構文の容認度に影響を与えている点を明らかにしている。本論文では、さらに同族目的語構文は英語起源の構文であるのに対し、軽動詞構文は基本的にロマンス語起源の構文である点を明らかにしている。以上の言語事実は、両構文を構成する記号構造は通共時的にも連続体をなしていることを示唆している。

形態素が構文の容認度に影響を与えることはPinker(1989)でもすでに指摘されているが、Pinkerは、この制約が構文に課せられているために構文の容認度が形態素によって変化すると述べるに留まっている。これに対し、本論文では、形態的制約の限界は言語構造の通共時的な連続性に起因すると主張し、形態素から文法までが連続体を成すため、形態素レベルで認められる合成パターンが文レベルの合成パターンにも適用されると主張している。このような連続体を想定することで、形態的制約の有用性と限界を示すことが可能になるだけでなく、構文を構成するレキシコンと文法を、記号の合成パターンとして統一的に分析することが可能になる。

本研究は、主に英語の構文現象の共時的な視点からみた文法研究を主眼としており、歴史的な視点からの構文分析の適用は包括的にはなされていない。しかし、本研究の通共時的な視点からの構文研究をさらに進めていくならば、動的な言葉の変容プロセスによって特徴づけられる日常言語の記号系の一面を，より体系的に分析していくことが可能となる。また、本論文の関連構文の創造的な拡張のメカニズムの研究は、日常言語の中核を成す文法の発現のメカニズムを一般的に解明していくための基礎研究としても注目される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２１年１２月２１日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降